

## 巻頭言

# ICA原則が目指すもの

中川 雄一郎

(明治大学教授)

昨年、ICA（国際協同組合同盟）は100周年を迎えた。現存する国際組織のうちで、100年もの長きにわたってその命脈を保ち続けている組織は、おそらく、ICAとIOC（国際オリンピック委員会）ぐらいだろう。この100年の間に、両組織とも、民族と民族が殺戮しあった世界大戦を2度経験した。その他にこの両組織は、ベトナム戦争やアフガン戦争を目撃した。経済のポータレス化がわれわれの目にはっきりと映るようになった1980年代以降も、戦争や紛争が続発している。悲しいかな、20世紀が「戦争の時代」といわれる所以でもある。それ故にこそ、来たるべき21世紀においては、民族や国家の間はもちろん、個々人の間にも「平和と共生」が支配することをわれわれは願わずにいられないのである。

ICAが形成される歴史に目を通すと、かつての協同組合人はなかなか冴えた頭脳の持ち主だったことがわかる。彼らは、ICAの形成の目的は「国際平和の実現」と「協同組合間の協力」である、と強調した。このことは、実は、ICAのもっとも基本的な目的は100年前も現在も変わらない、ということを示している。人間の努力は持続されなければならないのである。この100年の間、ICAに関わったすべての人と組織は、おそらく、それら2つの目的を実現しようと大きな努力を傾注したに違いない。なるほど、彼らは、ある時には、彼らの意思に反して、国家や政府や権力の前に無力であることを思い知らされたであろうが、時として彼らは、国家や政府や権力におもねることなく、努力の成果を多くの協同組合人に示すことができたのである。

「平和」の課題は小さくない。平和が崩れる時、紛争や戦争のさまざまな要因が一気に目の前に飛び出してくる。国家間の利害対立、歴史的な民族対立、宗教、イデオロギー支配、政治的経済的侵略など、もはや個々人の力や感情を超えてしまっているように思える。それでも個人は紛争や戦争の停止を叫ぶのであり、叫ぶことを決して止めないのである。ICAはそう叫ぶことを協同組合人に訴えた。だから、ICAは崩壊しなかったのである。ICAが、協同組合のもっとも基本的なルールを民主主義とみなす一層奥深いルーツは、実のところ、平和の課題に挑戦する心的態度にあるのではないかとさえ思える。

「協同組合間の協力（協同）」は、1966年に原則化され、今回の新原則にも第6原則として位置づけられている。これも容易に達成されるような課題ではないかも知れない。はっきり言えることは、協同組合運動の前にはだから多国籍企業や他の資本主義企業の大きな経済的一時には政府と結びついた政治的一能力がこの原則に対する脅威となっている、ということである。それでも、協同組合運動は「協同組合間の協力」の実績を積んできている。協同組合としては、かかる脅威を、その実績を一層よく積み重ねていくための機会に転化していくことが重要であろう。その意味で、協同組合人に期待するところ大変大きい、というべきである。

ICA新原則は協同組合運動をどの方向に導いていくのか。協同組合人は、今からしっかりと腰を据えて、21世紀における協同組合運動のパーспекティヴを示さなければならないだろう。